特集〈1〉わたしのスポーツライフ

スポーツのあと一杯飲んで・・・・

田中国夫
<関西学院大学社会学部教授>
VS 鴨居玲
<洋画家>
マンガ／たかはしもう

★一度は柔道か剣道をやった世代

鴨居　先生は昔からテニスをなさってたんですか。

田中　私はそもそも戦争中の世代ですからね。野球やテニスとかはもちろんありましたけど十分にはない時代、特に皮がたくさんいるサッカーやラクビーなどほとんどなく、柔道や剣道で育った世代です。今ではいろんなことをしますけど、それでもバレーやサッカー、ラグビーという大きな球はあきませんな。（笑）もっぱら小さな球です。小学校の時は少年野球をやってましたけど、中学では柔道部にいました。同じ道場で剣道と一緒にやってると、剣道はパンパンパーンとやってスカッとした感じだけど、柔道は何かゴチョゴチョって感じでね、あんまり好きになれませんでしたわ。

鴨居　私の子供の頃もやはり柔道と剣道の時代でしたけど、私はチャンバラにあこがれましてね。

田中　剣道。そりゃよかったわ。（笑）

鴨居　中学の三年まで剣道部でした。あの頃は映画館に入るのもうるさい頃でしたけど、阪妻（バンツマ）と嵐寛（アラカン）とどっちが強いかなどと真剣に討論してました。（笑）でね、私、関学の剣道部にちょっといたこともあるんですよ。すぐに追い出されましたけど。（笑）時々大学の剣道部につれていかれましてメッチャクチャにやられましてね。そりゃ大学の剣道部ってのはすごいですからね。それで剣道は志なかばにしてプッツリやめました。（笑）

田中　スポーツの喜びとか楽しみとかを味わうことなしに思春期を過ごしましたね。腹がへって今日はどうしようかという時代で、スポーツどころやなかった。今でもパン屋の前を通ったら足が止まってね（笑）アンパンの黒いアンが横から出てるのを見るとすい込まれていくような感じが今でもする。（笑）

★海国日本の心意気を示してみたけれど

田中　戦争が終わって大学に残って、それで広島から神

「トレーニングに行くたびに、飲みすぎて二日酔なんです」と鴨居さん

「やる時はバーッとやって、あとはぶったおれてるのは共通してますね」と田中教授

戸外大に来たんです。その頃から時々関学に遊びに行ってたんですけど、関学という学校は広島と全然ちがうでしょ。同じ日本にこんな学校あったのかと思った。だいたい勉強よりクラブ活動の方が盛んでしたよ。おもろい学校もあるもんやなと思いながら心理学の研究室に通ってると、みんなテニスしたり、スキーしたり。それで一緒にやろうと誘われてね、昭和26 27年頃からその悪い仲間に誘われて始めたのがテニスとスキー。

鴨居 それじゃもう二十五、六年になるわけですね。

田中 でもはじめの頃は一年に何回か思い出したように遊びでするテニスでね、だからうまいこと前にボールが飛ばないんですよ。テニスってのは相手がいるスポーツでしょ。あんまり人に迷惑もかけられんので、三年前に甲子園テニスクラブに入ったんです。

鴨居 かなりのものですね。

田中 ひたすら時間をみつけだしてね、壁を相手にボールを打ち始めたんです。大学生だったら一年の時にクラブに入ると四年間テニスをするわけですね。それと同じように今から四年間、大学生がクラブに入ったというつもりになってやりはじめたんです。壁を相手に三時間程やったら、ええかげん嫌になりますよ。(笑)

鴨居　ご立派。（笑）

田中　壁を相手にしてるとね、この人は私と同じ程度の人やなというのがわかるんですよね。この人だったらお互いに迷惑をかけあってもチョボチョボやな、という人をみつけだしてね、「えらいスンマヘンけど、ひとつ打ってもらえまへんか」とやるわけ。すると相手も「ほなやりましょか」といって、二人で球拾いばっかりやるわけ。（笑）へたなテニスですからね、そして指導者もいるわけじゃなく、みようみまねでやってるわけなんです。そうするとね、ある程度上達のコツがわかったりしておもしろいんです。自己実現の欲求が満たされるんですね。

鴨居　アマチュアスポーツの真髄というところですね。

田中　スキーも同じようなものでね、今でも二十年以上も前と同じ恰好で、ゼミの学生から「そんな恰好やめーな」いわれながら毎年お正月に出かけて行くんですけどね、骨折、ねんざ、キリキズ、何でもやりました。

鴨居　私は寒いところで子供の頃を過ごしましたので、スキーとスケートはゲタみたいなもので……。

田中　そりゃすごいな。

鴨居　いやいや、骨折もありました、もちろん。四カ月入院しました。（笑）

田中　四カ月も？　私は一カ月半ですよ。（笑）

鴨居　我々の子供の頃はスキーが折れたんですけど、この頃は足が折れるんですね。（笑）二カ所折れてて、一カ所お医者さんが見落してましてね……。

田中　見落した？

鴨居　ええ、レントゲンの写真より私の足のほうが長かったのでしょうね。（笑）ギプスをはずす頃にまた足がゆがみだしましてね、それで二カ所折れてることがわかったんです。

田中　いつ頃ですか。

鴨居　ブラジルへ行く前ですから十四、五年前ですね。信州から神戸まで二十何時間、つらかったですよ。まだ設備もなくてね、列車の通路に寝てましたよ。駅で駅員がおんぶしてくれるのはいいんだけど、私の方が寸法が長くてね、足をひきずるんです。これはつらかった。退院したら夏になってました。（笑）スキーも志成らずでした。（笑）

田中　剣道成らず、スキー成らず。（笑）

鴨居　まだあります。（笑）昔北陸のほうではね、夏は一カ月学校から日本海へ泳ぎに行くんです。

田中　臨海学校ですね。

鴨居　そうそう。それで普通の生徒は白いフンドシで、水泳部の連中は学校によっていろいろちがうスクールカ

ラーのフンドシなんです。それがまたカッコイイので水泳部に入った。県の水泳大会があったんですけど、私の親父がその頃新聞社にいましてね、その水泳大会の時、主催者のまん中に座ってるんです。親父のほうが落ち着いてない。だから親孝行のために棄権しました。(笑)

田中　水泳もまた成らずですか。(笑)

鴨居　でもね、スペインにいた時ね、私がいたのはラ・マンチャ地方なんですけど、村の人たちは海も見たことがないって人が多くてね、川といっても水がない。みんないい体格をしてて、何秒で泳ぐかってな感じでカッコイイんだけと、あまり泳げないんです、子供の頃から水に親しんでいないから。村にプールがありましてね、そこで海国日本の心意気と思って……(笑)三メートルぐらいの飛び込み台があるので、それに登って飛び込もうと思ったんですが、私、スキーで足を折ってから充分にしゃがめないんですよ。(笑)だからバネがきかなくって、飛びこんだのはいいけれど回転が一回半なんです。半ということはね、おなかを打つわけ。(笑)これはつらいですよ。村の人の尊敬を得ようとして飛び込んだんだけど、運悪く誰も見てなかったんです。(笑)がっかりしてもう一度飛び込んだ。みたか？　って聞くと「素晴しい！　すごーく大きな音がした」だって。(笑)

★タイガーマスクにあこがれて

田中　それじゃあ、最近はどんなスポーツですか。

鴨居　いや、お恥かしいけど、トレーニングセンターでボディビルをやってるんです。

田中　はあ、あの筋肉隆々の。

鴨居　なかなか筋肉隆々にはならないですね。(笑)神戸市は非常に設備がよくなりましてね、私の近所にも体育館がありまして、そこへ通ってるんですけど、私のはスポーツに入らないんじゃないかな。

田中　あれは根気よくやるんでしょ。だったらやっぱりスポーツですよ。

鴨居　帰国しまして夕方テレビを見てますとね、子供の漫画で「タイガーマスク」ってのをやってましてね、それに惚れ込みましてね。それでトレーニングセンターへ……(笑)私一人じゃ恥かしいから若い人たちに頼んで三人連れて通ってるんです。だから私の場合、動機は全く不純そのものです。(笑)西村功さんもやってるんですけど、彼は毎年秋の制作にかかる頃、腰が痛くなって注射をしてたんだそうですが、トレーニングに通うようになってから腰痛が治ってしまった。だから彼はほんとにまじめにやってます。私のは力道山を夢みて……(笑)

田中　その動機ってのはおもしろいな。

鴨居　私は流行歌でも映画でもテレビでも、すぐに影響を受けるタイプなんです。(笑)一緒にトレーニングに行ってる若い人たちも、今度は何を思いつくかとハラハラしてるんです。(笑)

田中　それで今回がボディビルってわけですか。

鴨居　元「グループゼロ」のリーダーだった和佐君たちは、軽く九〇キロを持ち上げるんだけど、私は六〇キロが限度ですね。九〇キロなんて、おしても引いても動かない。挫折感を味わいに行ってるみたいなもんですよ。

田中　六〇キロでも立派ですよ。

鴨居　若い人がいなければ、私だって何も六〇キロなんて持ちたくないですよ。(笑)それでもナワトビは五〇〇回ぐらいできるようになりましたよ。はじめは一〇〇回ぐらいでしたけどね。でも若い人たちは軽くやって息も切らせない。年がひと回りもちがうと大きいですね。トレーニングが終ってからビールを二、三本一息に飲んで、それから一気にウイスキーのストレートをダブルで四、五杯飲むともうできあがってしまいます。トレーニングに行くたびに二日酔いなんです。(笑)いつか私はトレーニングで病の床に入るような予感がします。(笑)

田中　私たちもそうです。どちらかというとテニスよりもその後で飲むのが楽しみだったりして。

鴨居　トレーニングを始めたために仕事は出来ないし、

命も短かいんじゃないかと思う。週二日は寝込んでるわけだから、私はもうこれ以上トレーニングに行く回数を増やせないんです。寝たっきりになりますからね。（笑）

田中　やる時はバーッとやって、あとはぶったおれてるのは共通してますね。

　私が行ってるテニスクラブでは、平日は退職した人たちと若い奥さんばっかり。若い奥さんたち、短かいスカートはいて一生けんめいやってますわ。あれをみるのも楽しみのひとつだけどね。

鴨居　体育館にも近所に若いサラリーマンの寮や住宅がたくさんあって、昼間は奥さんたちがたくさんきてます。夜は私たちのような中年が多い。時々ね、部長さんクラスのおなかのでた人が来るんです。一番初めに我々古参兵に（笑）聞くんです。「おなかはひっこむでしょうか。効果はあるんでしょうか」ってね。そうすると冷たく「いいえ」って答えるんです。（笑）敵はありありと落胆してる。（笑）

田中　いじわる。（笑）

鴨居　それでね、ほんとはもう止めたいんだけど、横で見てるからわざとね、さあ見てみろとばかりにナワトビを続けるんです。（笑）だからあとで倒れます。（笑）身体によくないですね。（笑）

田中　トレーニングして身体をこわしてたらなんにもならない。

★今度は少林寺拳法をやろうと思ってるんです

鴨居　ボディビルをやってますとね、自然に床に手が届くようになるんです。

田中　へえ、そうですか。そりゃあさすがだ。

鴨居　ところがすがすがしい方はそれでおしまいなんだけど、私の場合はね、バーへ行ってそれをやるんです。（笑）どうだすごいだろって。飲んでる中年の人たちは手が届く人なんていないから何となく陰欝な顔になって帰路につく。これがまたしあわせでして。（笑）

田中　なかなか楽しんでるみたいですね。（笑）

鴨居　こないだ中西勝さんと浅草を歩いてると芝居の小道具を売る店がありましね。そこに刀があるんです。あれを見ると私また血湧き肉踊るんです。（笑）剣道をもう一度やってみたくなる。チャンバラは子供からの夢なんです。ところが剣道ってのはヘンな声だすでしょ。あれは言葉じゃなくて奇声でしょ。あれが嫌いでしてね。来年の秋には少林寺拳法に入門する予定なんです。

田中　ホーッ。また若い人たちが犠牲になって？

鴨居　もう入門許可証はもらってるんです。そしてあのちぎってはなげ、ちぎってはなげ……これはやっぱり子供の頃からの夢。（爆笑）わかりますね、あの何千万円も使ってでも大学に入学させたいって気持。私、いくらお金を使ってもいいから拳法の黒帯が欲しい。（笑）刀を見ると剣道やろうかなと思ったり、町で強そうな酔っぱらいを見ると少林寺拳法をやろうかなと思ったり、今迷っております。（笑）先生はテニスとスキー一筋でお見事です。

田中　テニスをする時は充分に楽しんで、そのあと一杯飲むなら飲む。つまりさわやかに楽しんでさわやかに散っていく。テニスをしたあと仲間たちといろんな拘束があるとか窮屈さがあるとかじゃないので、それがほんとに気持ちいい。絵かきの人やら、ピアノ弾く人やら、ウナギを焼く人やら、新聞記者やら、いろんな人と交わることが非常に大事なことでね、何もそれを目的としているわけではないんだけれど、実にスポーツの楽しさと共に人との交友の楽しみがあるわけね。

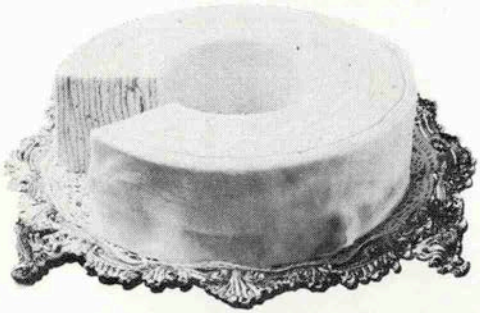
鴨居　先生のはね、アマチュアスポーツの真髄ですよ。その点私の場合はヒドイですよ。若い人たちと四人でやってますでしょ。お互いに誰か落伍しないかなとひそかに思ってる。（笑）誰かやめると酒の味がもっとうまくなりますからね。（笑）

　とうとうヤツは挫折したかウフフフ……といって杯を交わすわけ。（笑）

（竹葉亭にて）

バウムクーヘン

薄くスライスして、
すくうように
召しあがれ。



ドイツ菓子 Fachheim's

ユーハイム

本店	三宮生田神社前	TEL (331)1694
三宮店	三宮大丸前	TEL (331)2101
さんちか店	三宮地下街スウィーツタウン内	TEL (391)3539
西ドイツ店	フランクフルトゲーテハウス内	TEL (0611)280262

きものと細貨

おんがら屋

神戸

本部・仕入部　神戸市東灘区青木五丁目一五～一九　電話〇七八-四五二-五二九〇（代）

本店　市街地改造により工事中　昭和五十二年末完成予定

さんちか店　神戸市生田区三宮町一丁目一　電話〇七八-三三二-一七〇〇

東京

銀座コア店　東京都中央区銀座五丁目八-二〇（四階きものコア）　電話　〇三-五七三-五二九八（代）

渋谷東急店　東京都渋谷区道玄坂二丁目二四-一（五階和装名家街）　電話　〇三-四七七-三四〇九（直）

日本橋東急店　東京都中央区日本橋通一丁目九-二（四階和装名家街）　電話　〇三-二一一-〇五一一（代）（内線一九四）

池袋パルコ店　東京都豊島区南池袋一丁目二八-二（四階きもの小路）　電話　〇三-九八七-〇五六一（直）

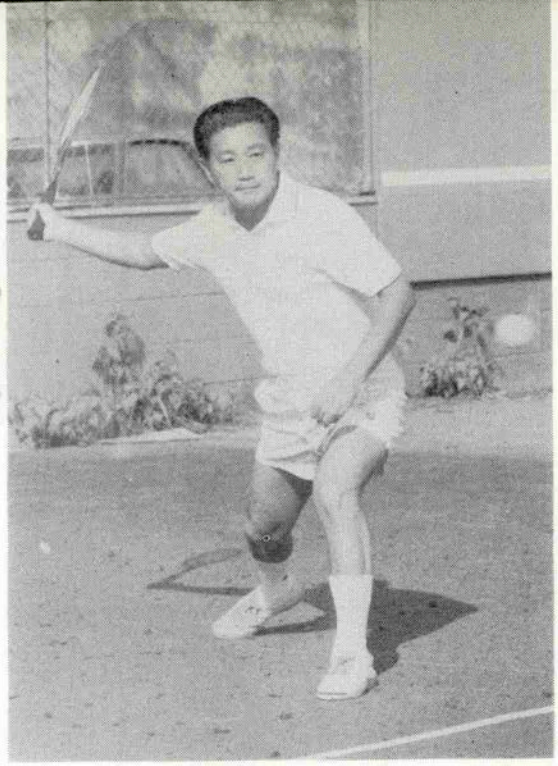
特集〈II〉わたしのスポーツライフ

テニス

フェアプレーの精神

北尾 信一
〈大丸神戸店店長〉

はやいものでテニスを始めて三十年になる。しかし私のテニスは所謂〝我流テニス〟。学生時代に選手としての経験があるわけでもないし、もとよりその後に華々しい経歴を持ったものでもない。昭和二十二年。戦後間もなく、株式会社大丸に入社。先輩に誘われるまま、ラケットを握った。また当時は百貨店の職業病(?)といわれたほどに結核が大流行。同僚先輩の中に病につく者が目立って多かったことも、一つの健康法として始めるきっかけになったようだ。



"我流テニス"とカッコイイ北尾店長

初めて、コートを踏んだのは神戸ローンテニスクラブであった。今の王子公園下ではなく、以前は阪神大石駅近くに所在し、周りに酒蔵の煙突が並んでいたことを思い出す。昭和三十年になって、自宅から歩いて五分のところ、芦屋川の辺りに芦屋ローンテニスクラブがオープン。この場所の便利さがともなって、ますます熱を入れることになった。

テニス仲間といえば、百貨店の休日がウィークデーといったことから、いきおい社内の人に限られてしまったことは残念であった。しかし、今テニスプロとして活躍している石黒・森(当社嘱託)両プロ、テニス写真家として世界の華麗なるテニスを我々に紹介している川延栄一君(元同志社大選手)の懇切な手ほどをうけたことは、私にとって忘れられぬことである。またご定年後の大先輩を迎えて開く、年二回のテニス大会も大きな楽しみの一つである。

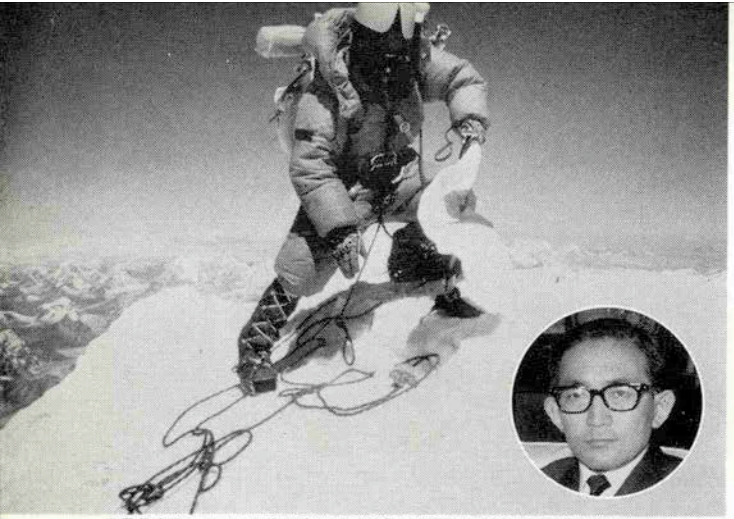
我流ながら、ふり返って三十年ともなるとやはりテニスを通じて知らず知らずに学ぶものがある。基本の大切なことである。球を目からはなすな。つま先はネットと平行に。球を待つときは、ラケットを両手に持って等々の基本である。これをくずすと、たちまち微妙にプレーを悪くする。勝っても負けてもすっきりしない、あと味の悪いものにする。仕事も同じである。「当り前のことを、当り前にやれば、当り前のことが当り前にできる」という言葉がある。常に自らもいい聞かせていることであり、若い社員にも口すっぱくいっていることである。そしてなお涵養に努めたいことは、フェアプレーの精神である。いかなるときいかなる事態に面しても、不変のフェアプレー精神を、日々の生活と、我流テニスを通じて、さらに養っていきたいものである。

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

登山

自然との語らい

平林　克敏
〈住友ゴム株式会社〉



世界最高峰、エベレスト頂上に立つ筆者（1970年5月12日午前9時45分）

私の郷里、長野県の大町は北アルプスの全山が見渡せる、絵のように美しい町である。郷里の山河を駆けめぐっている間にいつしか自然の持つ不思議な力に魅せられ中学から高校時代は、物象部というクラブに属して野外活動に明け暮れた学生時代であった。

野外活動の魅力は自然科学に対する学問的な興味というより、自然を相手にとことんまで遊び回ることができるという興味の方が大きかったように思う。

山岳気象の観測で登り始めた山がいつしか登山の方に比重が変り高校三年の頃には本格的な冬山登山に取組むようになっていた。

当時、一緒に山登りをした仲間のほとんどが進学してからも同じように自然を相手にする勉強をしながら登山を楽しみ、地質学や地球物理、生物学等の各々の分野で、今その第一線で活動している。

京都で学生時代を送った私は、登山が青春の生き甲斐であるかのように登り続け、やがてその心は、海外の未踏の領域に広がって行った。血を沸き立たせるような魅惑的な行為、青春の全てを掛ける何か確かなもの、大きく、激しく心を揺がす確かなもの……それは極地探検やヒマラヤ遠征、アンデスを越えてアマゾンへの旅、こんな計画を考える時、私の血がさわぎ心が燃えるのであった。

今から十七年前、まだ神秘と静寂が支配していたヒマラヤ山脈の七、〇〇〇米の高峰、アピに初登頂した時の感動は、今でも心の底にしっかりと根を下している。青春の炎で焼き着いたスタンプのようなものである。

人には心をみたしてくれる、何か確かなものが必要である。それは、その人自らが行動し体験し、そうして体得したものでなければならない。体験が厳しければ厳しいだけ成功の時の感動も大きく、体得したものの価値感は高いのである。登山は、人と人とが競うスポーツでもなければ、技や早さ、時間や得点を競うものでもない。自然を相手にした心との語らいを自然という道場に求めた修業のようなものである。したがって、どんな山にでも、どのような年令の人でも、自分自身が自由で高い動機に支えられた個人として、山を登ることができるのである。

街からわずか二、三十分で静かな六甲の山道に入れる楽しさは、山を知る人が発見する神戸の一番すてきな点である。

未知な世界に計画を進める心の動きとその慎重さ、行動の苦しさと、目標をみつめる時のあの激しい心、そうして一歩一歩慎重に歩を進めるのが登山の心だ。

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

野球

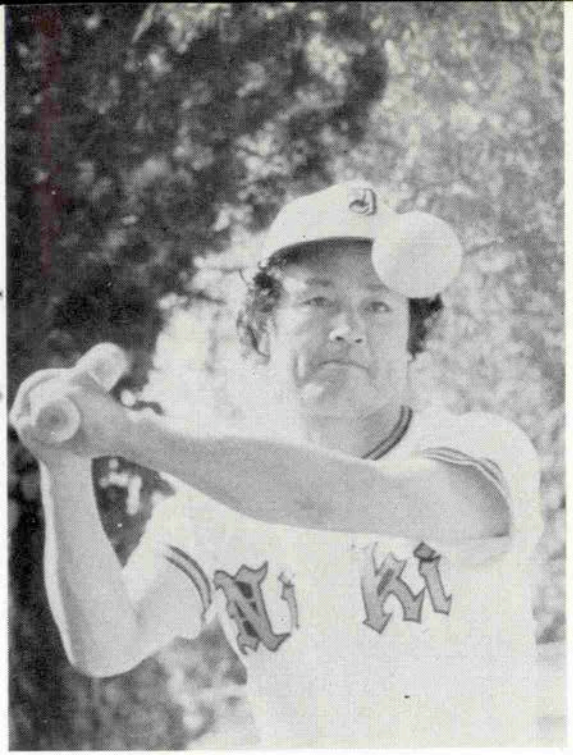
神戸二紀チームの横顔

知念　正文

〈二紀同人・神戸二紀チーム監督〉

昭和50年11月16日、元町画廊さんのお世話でオール関西行動美術対神戸二紀の初の野球試合が行なわれた。行動美術チームはユニフォーム姿もりりしく、さっそうと神大教育学部グランドに姿をあらわせば、我がチームは皆思い思いのトレパン・トレシャツ、お世辞にもスマートとは言い難いスタイルで対抗。何しろ初めての野球試合とあって、メンバーもかき集めで（あとで聞いた話だが野球の試合というものにはじめて出場したという人もいたとか）試合をせずして勝負が決まっていたようなものだった。案の定、結果は19－4で大敗した。しかしそのあとの交歓会では行動美術の人とビールをのみながら試合のこと芸術のことを語り合い、歌合戦をしたり（これは二紀が勝たせてもらった）とても楽しいひとときを過ごすことが出来た。

とにかく「またやりましょう」ということで春と秋に定期戦を行なうことになった。現在までに四試合をし、残念ながら目下四連敗中である。



さあがんばろう！（ノックをしているところです）

さてわがチームのメンバーを紹介しよう。支部長の中西勝御大は時々代打で登場（まだヒットなし）鴨居玲、小西保文両選手はベンチで他の選手にハッパをかけたりスコアをつけたり時には代打で、また守備固め？に出る。

現在打率一位の岡田弘選手は元町画廊からの補強選手、エース格の源内三好選手、守りのかたい井上進捕手、犬童徹一塁手、谷口和市二塁手、山田憲三二塁手、坂元薫遊撃手など多士済々。

外野は若さと俊足をほこる選手が多く、神保進、成相隆雄、森高茂、須藤泰吉、瀬戸和夫、森口忠藤高正義、森沢達夫の各選手、そのほか投手や内野をこなす巨漢の野田欽吾選手もいる。かくいう私は監督をしながら投手兼三塁手として四番を打たせてもらっている。忘れてならないのが西村功さん、上西良一さん、羽多悦子さんらを中心とした応援団。

芸術家とて体力が資本、体力づくりにはスポーツがいちばん、そんな単純な動機でチームができたが、仕事のあい間に太陽の下での野球が楽しめることは大変幸だ。神戸二紀チームはこれからのチームだ。

宿敵行動美術を倒すのはいつの日か。

特集〈II〉わたしのスポーツライフ

馬術

天高く馬走る秋

今村　秀樹
〈神戸商科大学助教授〉

現在とは違い、農耕や運搬にまだまだ馬が活躍していた時代に田舎で育ち、見たり触れたりする機会も多かったので一度はまたがってみたいと常々思っていた。学生時代の4年間ボート漕ぎに明け暮れし、新聞の記事が縁で、六甲山牧場の乗馬教室の生徒になったのが、乗馬を始めた切掛である。忽ち馬の虜となって、その時指導を受け、現在も同牧場の教官である木下芳雄氏が当時西宮で主宰されていた金鈴会に入会、学生時代の事とてキュロットや長靴買う余裕すらなく、ジーパンに運動靴という貴族のスポーツとやらからは程遠い出立にて、ある時は一七一号線の甲武橋から阪急電車のガードまで暴走されて、いつ川に飛び込もうかと必死で思い煩い、また仁川ピクニックセンターへの遠乗会では馬が棹立ちになり、落馬寸前の浮目に逢うなど、当時としては真青、いま想えば愉快な経験をした。同会が解散した後、神戸乗馬クラブに移籍し、爾来十年余、先輩諸兄に馬の乗り方と酒の飲み方を懇切丁寧に指導していただき、いまでは双方何とか半人前程度にはこなせるようになったが、中でも会長の佐用仙治氏にはとくに可愛がっていただいた。その頃氏が所有されていた名馬の誉れ高かった「飛燕号」に騎乗させていただき、数々の競技会に出場したが、何しろ未熟者のこととて、とても人馬一体とまではいかず、期待にそうことができなかったが、この馬には随分教わった。その後、和歌山国体でクラブの同輩とチームを組み貸与馬障害飛越に優勝したのが唯一の成績であろうか。

乗馬は老若男女を問わず、オールシーズンを通じて楽しむことができ、しかも男女の区別のないのが特徴で、現に大障害飛越などで幾多の男共を尻目に女性が優勝する例も数多くある。神戸乗馬クラブでも会員の過半数を占める女性達が「がに股にならないかしら」などと心配しながら、美容と健康を兼ねて天高く馬肥ゆる秋空の下馬と戯れている。よく馬から落ちるのが怖くて、という人がいるがこれとて万有引力のお蔭で下に落ちるからこそ良いので万一空に舞い上りでもすれば、それこそ一大事である。「落馬は楽馬である」と思う気力と、馬と人間との信頼関係を築くことが乗馬にはとくに大切なのではなかろうか。

ヒラリとかっこよく障害を飛び越えたゾ！

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

アーチェリー

夢はオリンピック

大西　道一

〈鐘淵化学工業㈱商品開発研究所〉

「休日になるといつもアーチェリー場に出かけてしまう」と、うちのかみさんがぼやく。そういえば習慣のようにレンジに顔を出さないと何となく落着かない。アーチェリーのどこがそんなにおもしろいのだろう。曰く、的を射る楽しみ。曰く、仲間とのふれあい。だがひょっとしたら私の身体の中には狩人の血が流れているのではないだろうか。

四十六年鹿島臨海工業地帯での工場建設の時、広々とした野原を前にして何かスポーツをと考えていた矢先(ほら出て来た)ふと通りかかったスポーツ用品店でアーチェリーを見かけ練習を始めた。帰神後、知人の紹介で道永さんの門をたたき本格的に始めることになった。的を睨むこと一年半、開眼のきっかけとなるアクシデントがあった。クラブ例会で本番開始直後、照準器のサイトピンが発射のショックで行方不明。しかたなくそのまま競技続行。草むらに落ちたピンを捜しながらの試合のいそがしかったこと。終了後気がつくと、練習でも出たことのない高得点が出ていた。今にして思えば、ピンがなくなり、やむなく的そのものをねらわざるを得なかったこと。ピンの捜索と矢を射る事に忙殺され、雑念の入る余地がなくなったこと。おそれ多くも無我の境地に出あっていたのかも知れない。この事件以後、成績が見違えるようによくなった。今でもサイトピンはわざとはずしてある。

現在私は神戸アーチェリークラブに所属している。クラブ構成員四十人。オリンピック、世界大会出場、全日優勝等々の戦歴を持つ中本新二、道永義利、宏父子、赤沢実等トップクラスから初心者まで、各ランクとりそろえている。

この四月全フィリピンアーチェリー選手権大会に出場したとき、マニラ市のバハガリークラブと姉妹提携し来年二月には先方でアミティマッチをすることになった。

戦果をちょっぴりご披ろうさせていただくと、神戸クラブでの優勝十回、今年八月の県民体育大会個人壮年優勝、四十九年全関西シニアー大会優勝、第六回オールジャパンインドア大会十位、第二十三回実業団大会個人九位。全国大会での上位入賞はまだまだながら将来わが頭上に世界選手権出場の栄誉を夢見る齢四十四才。――となると今日もアーチェリー場に出かけなくてはなるまい。

現代のロビンフッドはアーチェリー場に出現スル。

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

鉄砲かついで25年

ハンティング——

藤本　晶〈不動産業〉

僕が狩猟を始めたのは親父の古い銃を貰った時からだから、もう二十五年も前になる。父の知人で日本でも有名なブリダーでハンターの竹本恭太郎氏にいろいろ手解きをしてもらった。その頃はキジも山鳥もたくさんいたし狩猟の制限もずっと寛大だったので、父と共に全国各地へ行ったものであるだが近頃では、キジも山鳥もめっきり少なくなって、一日中野山を歩きまわっても一羽も出合わないことさえある。

狩猟家というのは鳥猟専門と大物（猪鹿）専門の二つに分けることができる。大物猟はグループ猟（僕たちの会は東神戸ビッグゲームハンターズクラブという）だから、一人のミスが全員の責任に繋がる。一グループ平均二十人という多人数のグループ猟では一人一人に細心の注意が必要だ。

グループ内ではチームワークが重要だが、猟場で隣合わせに猟をしているグループに出合う時はライバル意識を持つ。県下の猟場に行く時でも朝三時起床、五時集合と、貴重な休日を自分一人の趣味のために使って、と思うとどうしても待っている家族のために獲物を持って帰りたいと思うからだろう。

ところがある日、犬の声で一五〇メートル程先に大きな三又角の鹿を見つけた。よしっと狙いを定めて引き金を引く。弾が出ない。一瞬躊躇したが気を取りなおしてもう一度。又出ない。もう一度、もう一度と弾を入れ替えるのだがダメ。あとでよく調べると銃と弾が合っていなかったのだった。今ではこれに懲りてもっぱらライフル銃を使うことにしている。

北海道では十一月の後半十日間だけキジ猟が解禁になる。愛犬が追いたてたキジを初手の一発で川原の土手に落とした！と思って捜しまわったが影も形もない。犬に匂線を辿って行かせると、川縁で匂いが失くなっているのかウロウロするばかり。

まさかと思いながらふと川を見ると、幅五十メートルの急流のその川をキジが泳いでいるではないか。僕は唖然と見送っていた。この急流を流されつつも対岸に泳ぎつこうとするキジの生命力には完全にマイッタと思った。このように狩猟という生き物相手のスポーツでは学ぶことや感動することがたびたびある。

今一番の僕の夢はアフリカへビッグゲームハンティングに行くこと。

さしあたって来年は、今年輸入した大物猟犬五頭の古里アメリカとカナダへ行くつもりだ。

今夜の食事は今日の獲物、ボタン鍋だよ。

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

ラグビー

中年ラガー健在なり

田中　実〈田中医院院長〉

身長九八㎝、小学校一年生のとき。身長一三一㎝、中学一年のとき。いうなればチビ、ところが生来負けん気が強く、人のできることは、できなければならないと決めていたようなチビ。水泳、蹴球、競走、野球、やり出したら止められない性格もある。中学時代は戦争中のこととて体操ぐらい。鉄棒で何度砂を噛んだことか、未だに掌に豆のあとがある。

戦後、学生時代は物資不足の折り、野球も硬球となると貴重品、破れたら縫い合わせて何度でも使う。昭和二四年には庭球を始めた。ラケットは父の古いのを拝借。コートではもっぱら裸足で練習。幸い戦時中は裸足で運動場を走っていたのでわりに平気。

卒業後は大学病院のチームで野球。一日四試合も捕手を務めたこともあり、ホルモンタンクと呼ばれるぐらいスタミナがあった。足の方も結構速く重宝がられた。基礎医学の研究室に入ると教授の目がきびしいため、運動らしい運動もせずひたすら学問に励んでいた。が、体中の筋肉はしばしば活動を望んでやまず、神戸生田区医師会野球部の捕手をすることで自らを慰めていた。

昭和四二年神戸で開業したころ私の周辺にラグビーをする人達が多く、たまたまテレビで観た試合で感ずるところがあり、三八才からラグビーを志すこととなり、以後十年間、首までどっぷりとつかったままの状態。全身全霊を楕円球に打ち込み、口はからから苦しい呼吸。それでもゲームを終ったときは、何かスカッとしたものが感じられる。

病がこうじて本年5月仲間の関西ドクターズラグビークラブとともに遠征試合にニュージーランドへ。そしてやりました。もちろん負けましたが…。相手はカンタベリー大学OBチーム、74－36と大敗。でも清々しい気持で、まるで勝ったような気持、試合後はビールをくみ交わし早や10年の知己の如く。当地の新聞は「Old Rugger never die」と中年以上の我々に驚きの表現。

今年もシーズンに入った。7月8月炎暑の中、大汗をかいて若いドクターと一緒にトレーニング。物好きなと言われても意欲旺盛。足が前に進まなくなれば、やめねばなるまいが、それまでは。

診療、保険請求の合い間に仲間と集まって、ラグビーのあり方や作戦を論じたり、日曜日のゲームの結果や戦評を短信にしてクラブ員に送る。

まったくこんな楽しいスポーツと何故もっと早く接することがなかったかと、今悔んでいる次第である。

「ソレ！タックルだ」「あとはたのむぞ」みごとなチームワークだ。（右端が筆者）

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

ゴルフ

ポッポッやってます

石井　知子

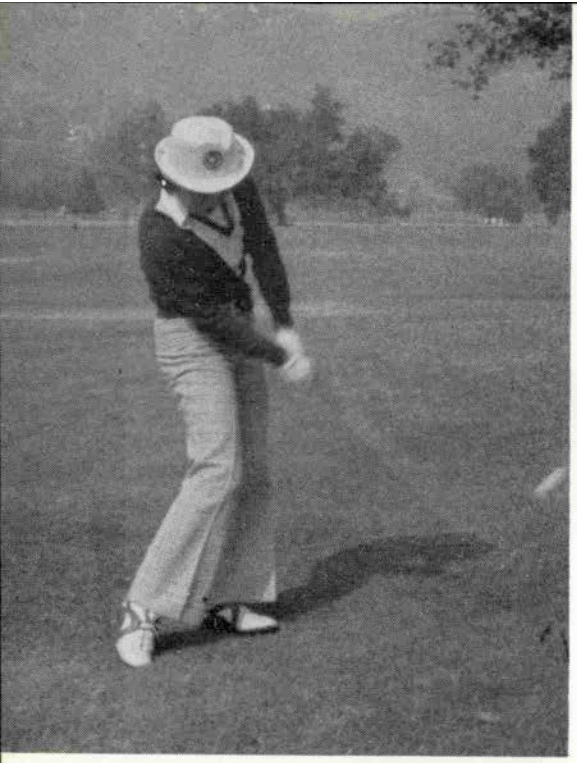
〈石井一運輸政務次官夫人〉

三年前の昭和四十九年九月、IPN（列国議会同盟）に出席する主人に同行してロンドンに参り、そのまま友人のディヴィッド・フロイド夫妻（ディリー・ニューズ記者）の家に二カ月ほど滞在しました。フロイドさんの家はハイゲイト村（ロンドン北郊）にあり、すぐ近くに有名なハイゲイト・ゴルフ・クラブがありました。

その頃私はまだコンペに一度も出たことのないビギナーでしたが驚いたことに日本大使館主催のゴルフコンペに誘いを受けました。

「皆様にご迷惑になりますので」とお断りしましたが「加藤大使夫人も参加されます。女性が一人で困っています」と無理にメンバーに入れられました。

さあ大変、練習をしなくてはというわけで、ハイゲイトクラブと近くの打ち放しの練習場に通い始めました。クラブのフロントに電話を入れてびっくりしたのは「いつでもお好きなときにいらっしゃい」という返事。まず一ラウンド分の料金二・五ポンド（約千五百円）をとられて「さあどうぞ」。



美しいグリーンでさわやかなゴルフをと石井夫人

この安さに二度びっくり。

キャディは全然なし。日本では決して使わないようなボロのカートが置いてある。それを引っぱって一人で出発。とくに希望すれば近所の男の子がキャディになるというが雇う人はほとんどいない。一ラウンドすると約六キロ、足がガクガクになる。ウィルソン元首相も毎朝グリーンを回るゴルフ好きだが、やはり自分でカートを引っぱると聞きます。この〝つらさ〟を吹き飛ばしてくれるのがグリーンの美しさ。秋でも冬でも一年通して緑色をたたえるエヴァーグリーン。日本にどうしてあの芝がないのかと思うほどの瑞々しさで私は異国の地で精神的にも肉体的にも本当に慰められました。

打ち放しの練習場はごく原始的な感じ。コインの自動球売り機などなく、プロがゴルフ用品の売店を持っていて申込むとレッスンをしてくれる。このプロがウエールズ出身で茶の髪、ブルーの目、彫りが深く背が高くとても若くてハンサム。このように買物に行くように気軽で、いつでもできる本場のゴルフ、それに自然の美しさ、これらが私を引きつけたようです。

私はこれからもポッポッと息の長いゴルフを続けるでしょう。汗をかいた後のさわやかさと、新しい友人ができることを願って。

特集〈Ⅱ〉わたしのスポーツライフ

アメリカンフットボール――

体力の限界も越えて

米田　満
〈関西学院大学体育会OB倶楽部幹事長〉

世をあげてフットボール時代、とまではいわないが、ここ五、六年の日本のスポーツ界を眺めていると、伸び率からいって、このスポーツの飛躍発展ぶりは、恐らく1、2といって、3とはさがらないであろう。いまや、〝UCLA〟のマーク、2ケタの数字マークは巷に氾濫して、フットボール・ルックがヤングのファッションの世界を圧している感さえある。

かつてフットボールをやったオールド・タイマーたち、中年を迎えてボテの入った連中が「オレたちにもやらせろ」と名乗りをあげたのは二年前のことである。その名も「OLD KWANSEI 50S（オールド・クワンセイ・フィフティーズ）」。一九五〇年代に関西学院大学でフットボールをやった男たちのチームというわけだが、そこはもう少しだけ範囲をひろげて、年令満35才以上のチームとした。

最初の試合は明大OBでこれまた35才以上の「オールド・ヤンガーズ」である彼らは45名、迎えうつ我々は65名の大部隊、互いに久しぶりのフットボール・スタイルで喜々として西宮球場で相対した。ホームゲームであり、形勢優位の試合のベンチは忙しい。関学総監督の私は、このチームではまた監督に返り咲いて、手配師のごとく、取っかえ引っかえメンバーをフィールドに送りこんだ。そして、折角だから、自分も少々は出場しなければならない。

十年ぶりにフィールドに出た。局面は明大の攻撃、関学の守備である。明大は長身のエンドに短かいパスを投じ、私はこれに対して猛烈なタックルを敢行した。重い長身の男がズドーンと倒れた。途端に、腰の骨がメリメリと破壊されるような衝撃を私は自覚した。

試合は37―13で、我々は緒戦の勝利を飾った。ところが、情ないことに、私は腰の痛みを完治するのにその後、三カ月を要したのである。

正直いうと、この試合に備えて3月下旬から身体をほぐしにかかった我々は、その練習中に3人、そしてその試合のときに1人計4人の者がアキレス腱切断の憂き目にあったのである。

フットボールはブロッキングとタックルのスポーツである。この衝撃に耐えるにはやはり相当の訓練を要するし、もちろん体力の限界、年令の限界がある。それ以後わがチームはさらに練習に身を入れ、この春、ヨコスカ・グレイ・ホークス（35才以上の米軍チーム）を28―13で見事に破った。

肥り気味の私は専ら監督業に打ちこんでいる。

明大OBチームとの第一戦に勝利をおさめ、カップを受ける総監督の筆者

特集〈II〉わたしのスポーツライフ

ヨット

小さな風の冒険

林　忠厚
〈日航国際旅客販売部〉

この夏、シーサイドクラブ一世号（塩屋シーサイドパレス所属）の五人のクルーの一人として小さな海の冒険を試みた。

それは――夜、六甲の涼風に帆を上げて神戸港をスタート。湾内に停泊中の本船や漁船の間を抜けながら第一ポイントの友ケ島の燈台へ針路を合わせる。沈みこむような夜の海を見つめていると日々の都会での仕事のことが全て流れ去り、やっとの思いでこの短い航海に参加できたことがウソのように思えるのである。週末のほんの半日程、潮風に吹かれることに生きがいを見つけている他のクルーの顔にもなんともいえない開放感があふれている。

小生自身はヨット歴は浅く（三年）スキッパー（艇長）に号令されながら狭いデッキをウロウロするのが関の山、それでも風に恋をし海に憧れる気持ちは他のヨット仲間に負けないし、これぞわがスポーツライフの極みと信じている。

友ケ島水道を過ぎ、羅針盤をピタリ180度に合わせ一路紀伊水道を南下する。第二ポイントは日野岬の灯台である。プラネタリウムでしか見られなくなった夏の星座が360度の視界に広がり夜光虫に光る航跡と流れ星の、ファンタジックな時間を満喫、帆を観音開きにしてランニング。舵輪にはヨット全体にかかる風の重量がビート音となって伝わってくる。

夏の朝は早い。4時半ごろには東の空が緑からオレンジに変わり日の出を迎える。日野岬が朝日の中で太平洋にせり出しているのを朝食の風景にしていた頃、突然、強烈なつむじ風。ヨットが暴れ始め操舵不能！ジェットコースターのように狂走する艇、全員でデッキにしがみ付きセールを下げやっとのことで横転をまぬがれる。ヨット歴十数年の艇長の迅速適切な号令がなければ太平洋で半沈のまま漂流……と思うと今さらながら、〝風〟という気まぐれな自然と対待するスポーツの厳しさを知らされる。

潮岬を視認して大きくタッキング（方位転換）、周参見港に寄港。帰路は深夜に出港、早朝のトローリングを楽しみながら四国沖合を機走――というものだった。

この二昼夜の短い航海からでも陸では味わえない自然を知りささやかな冒険ではあるがヨットからスポーツ以上のことを学べる自信がついたことだけは確かだ。

自然と人とつながりが海にはある、やっぱり男のロマンかな

特集〈II〉わたしのスポーツライフ

ゴルフ

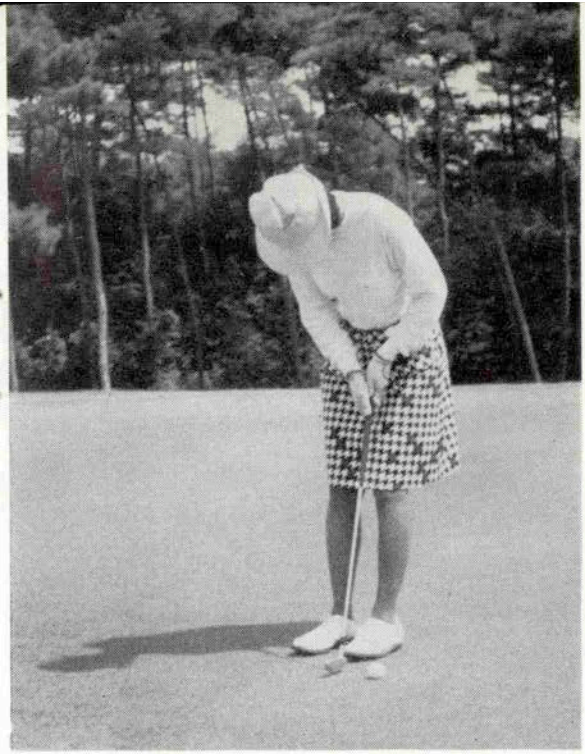
ご一緒する楽しみ

西村　中子〈甲南カメラ研究所〉

ゴルフをはじめて二十年。もともと上手でもないゴルフでコースに出るたびに情なくなる有様ですが、ゴルフの楽しみには尽きないものがあるように思います。

主人がゴルフ好きで、うまかったこともあって、ずいぶんいろんな方とゴルフをさせていただきました。上手な方のなかに入れていただいて、自分のゴルフは別にしてゴルフの面白味を存分に味わうこともなつかしい思い出です。

主人とプロの福井さんと三人でゴルフをした時のことです。ティーが小高いところで、左が谷、打ちおろしというホールに来た時、急に風が強くなり雪が吹きつけてきました。見ていますと二人とも谷へ向って打つではありませんか。そしてボールはちゃんとフェアウエーに帰って来ています。成程この風ならあそこへ打てばいいのだなと私もその方向を狙って一生懸命に打ちました。満足してボールを見守っていますのに私のボールだけはまっすぐ谷に消えてしまいました。狐につままれたような顔の私に主人は「何であんなとこへ打ったん？」と言いました。私がボールは勝手にまがることはあっても、まがるように打つことが出来るなんて夢にも思っていなかった頃のおはなしです。よくご一緒した方でとても口の悪い方がありました。私の方が背の高いのもお気に入らないらしくうっかり前に立ったりすると「コースが見えん」。たまにオーバードライブでもしようものなら「あんたスカートはいてるがズボンと間違えてんのとちがうか」とやられてしまいます。夏の盛りに暑さとポンポン出て来るわる口に笑わされてフウフウ言いながら歩いているうちに、何となくどうしても負けられないような気分になって来ました。それまでの私は勝負のことなど考えたこともなかったのです。大事のパットでも入れようとは思ってもみず、どうぞそのへんへ着きますようにと打っていたのです。それが何時のまにかどうしても入れようという気になって一生懸命に狙っていたのです。しかも何となく思ったようなラインで球がカップに入るではありませんか。その日はおかげで私が勝ってひとしきり結構なお言葉を頂戴することになってしまいましたが、カップに入ったのではなく狙ってカップに入れることを私に教えて下さった大恩人だと思っています。



狙ってカップに入れなくてはと西村中子さん

特選ヨーロッパの旅

●お正月コース

★ローマ・ジュネーブ・パリ　10日間
……261,300円

★12月26日(月)・12月29日(木)(11日間)・12月30日(金)

★アテネ・ローマ・マドリード・パリ　10日間
……319,300円

12月28日(水)・12月31日(土)

'78　2月3月コース

★ヨーロッパ13日間5ケ国6都市めぐり
……298,000円

＜ローマ・フカレーンス・ジュネーブ・パリ・ロンドン・アムステルダム＞

2月8日(水)・22日(水)・25日(土)

3月8日(水)・22日(水)・29日(水)

★ヨーロッパ15日間8ケ国めぐり
……369,000円

＜ロンドン・パリ・チューリッヒ・ミュンヘン・ローマ・マドリード・リスボン・アムステルダム＞

2月13日(月)　3月20日(月)

★ヨーロッパ10日間4ケ国めぐり　272,000円

＜ローマ・ジュネーブ・パリ・ロンドン＞

2月13日(月)　3月13日(月)

●ハワイの予算でヨーロッパが実現！

★パリとローマ8日間

12/23・2/10・2/13・2/17

※全コース　大阪発・着　添乗員付き

あなたを世界の街角へ

ニュー・オリエント・エキスプレス株式会社

〒530 大阪市北区堂島浜通り2-4 古河大阪ビル1F

☎(06) 343-1961代

運輸大臣登録一般旅行業第41号　担当・吉田まで…

秋の色をさわやかに仕上げます。リフレッシュ・クリーニング

あなたのファッションをFRESH UP!

Fashion Cleaners ニシシマ

神戸市灘区岩田町1 ☎078(851)2440㊡

山手店　三宮店　熊内店　宝塚店

□キャンペーン／トアロードを考える(3)

個性豊かな坂のある町づくりを

ここに一つの指摘がある。日本人は東西に歩くのは平気だが、南北となると弱い。坂に抵抗を感じる。その反面、外国人は南北に強い。そうすると神戸の文化は南北に歩く外国人と東西に歩く日本人との接点によって生まれて来たのだ、と。

ところが、神戸には昔から南北の商店街は仲々発達しない傾向がある。トアロードはその名が広く知れわたっているということでは唯一の発達した南北の商店街だ。

神戸は昔から山と海との町だといわれているが、山と港までまっすぐに通っている町はトアロードしかない。その意味でもっともっと大事にしないといけない坂の町なのだ。国際性も豊かで、トアロードで外国人と行きかうことも多く、我々はそういう光景に慣れ切っている。

かつては今の税務署のあたりに教会があり、両側には夾竹桃の木がズッと植わっていた落ち着いた雰囲気があった。さらにトア・ホテルというシンボルもあった。無論、昔の雰囲気ばかりを追っていてはダメだが、今でも伝統的なハイカラさが残っている。

そのトアロードは今や一つの町としての意思表示をしなければいけない段階に来ている。単に神戸だけではなく、全国各地から人に来てもらうような設定が必要な時期が来ている。

★神戸ならではの町づくりが可能

前回は北野界隈との関わりでトアロードをみて来た。今回は大丸前商店街、元町との関わりで、トアロードはいかにあるべきかを考えてみたい。

北野―トアロード―元町と考えてみたとき、北野、元町はその性格こそ違え、すでに町づくりとしてはある程度動かしがたいものがある。この北野と元町をつなぐのがトアロード。そこでは昔の伝統を現代にどう生かして行くかが問題となる。この三者が同じ色になっては町づくりとしては失敗だ。全部が赤になったら困る。元町が赤、北野が黒ならトアロードは緑というようにそれぞれが個性豊かな町づくりを目指さないといけない。

外から来た人が、元町からトアロードに入ると、おや雰囲気が変ったなあ……と感じるように、また、逆に北野からトアロードに入っても、今までの気分とは違うことに気づく。下から見上げると両側に並木が揃い、ちょっと歩いてみたいなあ……という気分にさせる演出が必要だ。

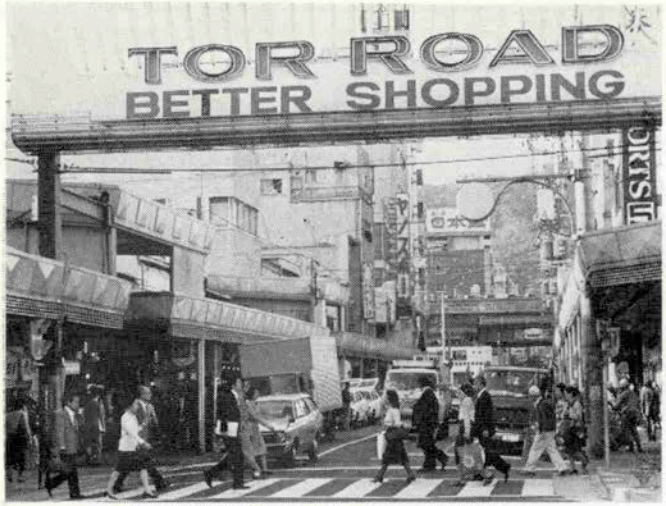
トアロードは伝統的な洋家具、洋菓子、洋服などが現代的に生かされる町だし、洗練された神戸ならではの町づくりが可能な町だ。少なくとも巨大ビルが立ち並ぶ無味乾燥な町になって欲しくない――。これは神戸を、トアロードを愛する市民一人ひとりの心情だろう。

★商品構成にもトアロードらしさが必要

しかし、トアロードの現状にはいろいろと解決すべき問題が残っている。

その一つが前回でも問題になった南北の流れをいかにスムーズにするかという問題。その最大のネックが高架。ぶらぶらと散策を楽しんでいても、ここで感覚的にストップさせられてしまう。かってあった電車の踏み切りを再現して東西の交通を遮断してしまおうというアイディアもある。また、高架が見通しを邪魔しているので、少しでもその抵抗感をなくすため東西の交通の邪魔にならない範囲で高架の前に背の高い木を植えて高架を隠すという提案。しかし、これらは民間だけではどうしようもないことで行政の協力が望まれる。

かつてのトア・ホテルは最も神戸らしいホテルだといわれていたが、今は外人倶楽部として特定の人たちだけしか使えないようになっている。ここにかつてのトア・ホテルのようにトアロードの終点として何かそれにふさわしいものに変える方法はないものかという声もある。



大丸前商店街からトアロードを眺めると、高架が目につく

トアロードの散策の途中、北野へと続く途中で誰でもが利用できるような施設が欲しいということだ。

さらにこれはしばしば話に出ていることだが、歩道の整備。質的には素朴なものでもいいから南北に統一されていることがポイントになる。大丸から外人倶楽部までは一つであるとのイメージづけにもなる。また、歩道に段差をつけるのもいいのではないかとのアイディアもある。

あと、車道と歩道の付設物——街路樹、樹路灯、移動式のグリーンベルトなどをどうするかという問題。

さらに地上から電柱、電線を撤去できないかという要望。たとえば、銀座は一〇〇周年のときに電柱を地下に入れ、水銀灯も統一し、四つ角の信号の柱も統一した。無論、地元の負担は大きいが、電柱があったり、電線がはりめぐらされている現状は決してファッション都市神戸の散策道路、シンボル・ロードとしてほめられたものではないだろう。

また、外観だけではなくどういう商品を売って行くかもトアロードの性格づけに重大なポイントだ。北野、元町、大丸前とそれぞれに性格のある店があり、商品を扱っているが、トアロードらしい特徴ある商品構成がぜひとも必要だ。

いずれにせよ、いくら良いからといって外国の単なるコピーではダメだ。単にトアロードだけのことではなく神戸全体の将来構想のなかでの一環としてトアロードを考えなければいけない。

たとえば、北野—トアロード—栄町にロンドンを走っている二階建てのバスを走らせるというアイディア。サンフランシスコの市電のように二、三十キロの速度でゆっくりゆっくり走らせ、自由にとび乗ったり、とび下りたりできる。こういう楽しいアイディアもいろいろ出て来るのだが…。トアロードはトアロードだけのトアロードではない。神戸のトアロードなんだという確たる視点の下での町づくりが何よりも必要なのだ。